

待望の全訳 唐代の異国情緒

石見 清裕

たしか四、五年前の風薫るころだっ

たと思う。たまたま電話で伊原弘氏（城西国際大学）と話す機会があり、その折に氏より、エドワード・シェーファー（Edward H. Schafer）の *The Golden Peaches of Samarkand* (University of California Press, 1963) を日本語訳する計画のあることを知らされた。訳者はアメリカ在住の日本人でシェーファーの教え子であり、作業はかなり進んでいるとのことであった。

私は、同翻訳事業についてはこの時まで全く知らなかった。あの大作の全訳が出るのであれば、これは大変なことである。その年の唐代史研究会夏期シンポジウムで本情報を話題にすると、やはり初めて聞く人が多いとみえて、随分と驚か

れたものである。

昨年（二〇〇七年）七月、その待望の翻訳書が勉誠出版アシアナー叢書から刊行された。唐代研究にたずさわる全ての者から、拍手をもって迎えられたに違いない。

*

中国史上に現れたいくつもの王朝は、それぞれに特徴的な時代相というものをもっている。そのなかでも唐王朝というと、最も華やかな文化が開いた時代というイメージを抱く人が多いのではないだろうか。そうしたイメージをもたらしものとして、絢爛たる貴族文化やわが国も輸入した最先端の鮮やかな仏教文化などとともに、多くの人が唐代の国際色豊かな文化に華やかさを想起するのではな

エドワード・H・シェーファー著／伊原弘日本語版監修／吉田真弓日本語版訳
サマルカンドの金の桃



A5判 518頁
勉誠出版 [5040円]

からうか。そしてそれは、シルクロード交易によつて西方とつながった唐の時代相から見ても、決して誤ったイメージではないのである。

こうした唐代文化の様相を描写した先駆的業績として、『長安の春』（石田幹之助、創元社、一九四一年）と『唐代長安と西域文明』（向達、生活・読書・新知三聯書店、一九五七年）をあげることができる。両著は、唐文化に与えたペルシア文化の影響を論じた古典的名著といえよう。一方、イギリスの著名な歴史家アーノルド・トインビーは、唐代の文明を、秦漢に形成された中国文明とイラン・インド文明とを両親として生まれた子文明ととらえ、

文明世代論によつて唐代を理解しようとした(『トインビーと文明論の争点』、山本新、勁草書房、一九六九年、第五章)。

ところで、人間がその生活のなかで、先祖伝来の文化ではなく、新しい外来の文化に異国情緒を感じるとき、必ずそれは我々のもつ五感によつて起る。すなわち、今までにない形や色合い(視覚)、音色(聴覚)、食べ物(味覚)や香り(嗅覚)、手触りや肌触り(触覚)によつて伝統文化にはない斬新さや心地よさを感じるのであり、それらの複合によつて新時代の雰囲気味わうのである。つまり、そこには必ず新しい「感じ」をかもし出す「モノ」が存在する。それならば、唐代の中

国人が異国情緒を感じ取ったモノとは、どのような物質や製品であらうか。本書は、それを分析した研究書なのである。どのようなモノが取り上げられるか、目次によつて示してみよう。

序章／一、唐朝のきらめき／二、人三、家畜／四、野生動物／五、鳥／六、毛皮と羽／七、植物／八、木材／九、食物／一〇、香料／一一、薬／一二、紡織品／一三、顔料／一四、鉱物／一五、宝石／一六、金属製品／一七、世俗の器物／一八、宗教用品／一九、書物

各章は具体的な品種によつて節に分けられ、第二章以下の節数は合計一八一に

および、取り上げられる物品は二〇〇種を超える。巻頭に礪波護氏の「序言」と伊原弘氏の「序文」、巻末に参考文献関連略年表に続いて訳者吉田真弓氏の「あとがき」を付す。参考文献には四三九篇の論文・研究書が掲げられ、各章の著者原注も充実しており、注が二〇〇を超す章も珍しくない。

本書の書名となつたサマルカンドの金の桃とは、『旧唐書』西戎伝や『唐会要』巻九九所載の康国の条に、貞観十一年(六三七年)、『唐会要』は貞観九年(一月)のこととして、「また金桃・銀桃を献す。詔して之を苑圃に植えしむ」とある「金桃」に由来する。ただしそれだけではなく、

多言語・多文化社会へのまなざし
―新しい共生への視点と教育―

A5判 ■ 2730円

赤司英一郎・荻野文隆・松岡榮志 編

価値観や歴史の多様性を多角的な側面から分析。人々の生き方や社会の多様な姿を総合的に感じ取ることの出来るアプローチを試みる。

中国語 談話言語学概論

A5判 ■ 13650円

王福祥 著 高橋弥守彦・統三義 訳

《話語言語学概論》(外语教学与研究出版社、一九九四年)を翻訳。中国語の構造を、大きな単位で分析するための格好の概説書。

日中対照表現論

―付:中国語を母語とする日本語学習者の誤用について―

藤田昌志 著
A5判 ■ 2100円

白帝社

※価格は税込
〒171-0014 東京都豊島区池袋 2-65-1
TEL 03-3986-3271 FAX 03-3986-3272
http://www.hakuteisha.co.jp

著者シエーファーは、ギリシア神話に見えるヘスペリデスの黄金のリンゴ（訳書二頁「桃」は誤り）や中国神話に見える西王母の不老不死の仙桃その他を加味し、この言葉に西方のエキゾティシズムを代表させたのである。本書は、中国では一九九五年に呉玉貴訳が中国社会科学出版社より刊行され、ここでは書名は『撒馬爾罕的金桃』ではなく『唐代的外来文明』とされたが、日本語訳は著者の意向を汲んだものと思われる。また、原著には『*A Study of Tang Exotics*』の副題が付され、これを日本語訳が「唐代の異国文物の研究」と訳したのは、本書の内容に沿った考慮であろう。

*
中国の西方外来文物といえは、ベルトルト・ラウファー (Berthold Laufer) の『シノ・イラニカ』(*Sino-Iranica*, Chicago, 1919) を想起する人が多いであろう。この書は、中国における栽培植物の起源を調べ、そのうちのイラン原産種を分析した研究である。シエーファーは本書『サマルカン

下の金の桃』の巻頭でラウファーへの献辞を書き、序文を見てもいかにこの先輩を尊敬していたかがわかる。ところで、奇遇なことに『シノ・イラニカ』も本書とはほぼ時を同じくして『古代イランの文明史への中国の貢献』(杉頼夫訳、新風舎、二〇〇七年九月) という書名で日本語訳が刊行された(この書名は原著副題の直訳だが、工夫できなかったか)。関心の類似するこの両書が、同時に日本語で読めるようになったことは大変喜ばしい。

ただし、似た問題関心をもつとはいっても、両書には基本的に大きな差異がある。それは、『シノ・イラニカ』が主として植物を分析したのに対し、本書はそれ以外の物品を取り扱い、植物は対象の一部にすぎないという点である。『シノ・イラニカ』には合計五九種の植物が項目に立てられているが、このうちシエーファーが本書で取り上げたのは、第七章の「棗椰子」「鬱金香(サフラン)」「仏土葉」「水仙」、第一〇章の「蘇合香」「没葉(ミルラ)」「青木香」「茉莉油(ジャスミ

ンオイル)」のわずか八種である。そのかわり、植物以外の物品が多く取り上げられ、またしばしば詩文・散文作品が引用される。すなわち、考古学・言語学専攻のラウファーが植物を中心とした「博物誌」を記したのに対し、中国文学専攻のシエーファーは、どういう物品が当時の作家の感性にどのようなうったえたのか、作家と同じ地平に立ってその感覚を認識することに、関心の主体があった。この点が、両書の際違った違いを形成したのである。

*
シエーファーは、一九一三年、シアトル生まれ。カリフォルニア大学バークレー校卒業後、ハワイ大学で中国語学・文学の修士を取得、戦後バークレー校で博士号を得て、その後同校で教鞭をとり、九一年に癌で亡くなった。五三年一〇月より一年間、京都大学人文科学研究所に外国人研修員として滞在したことがある。生涯に単行本一四冊、学術論文一三二篇を発表した。二〇世紀後半のアメ

リカの中国学会をリードした研究者である。銀髪に黒革のジャンパーが似合う縹渺とした人だったという「あとがき」五一六頁。

氏は、外来語に対しては非常に敏感で、すべてその語源を探り、正確な英語に置き換える態度を貫いた。したがって、本書においても動植物の学名が頻繁に登場する。それらを逐一調査して和名・漢名に直さねばならないのだから、翻訳にあたってはさぞや苦勞があったであろう。

その苦勞は、吉田氏の「あとがき」から察しても余りある。漢文史料を読む誰しもが、同様の調査をした経験をもつであろうが、苦勞の割にはなかなか結論にたどり着けないものである。その作業を原書の本文二七七頁にわたって行い、訳し切った吉田氏に心から敬意を表したい。

ただし、本書に対して全く苦言がない訳ではない。本書の性格上、第一章では交通路に触れられるが、敦煌からトゥルファンへの道が塩の白龍堆を横断してまっすぐに通っていたかのように記され

(二〇頁)、また「朝貢物」の節では、長安到着後の外国使節団が玉座に向く四つの大門に隣接した施設に宿泊したと記される(三七頁。これは『六典』巻一八鴻臚寺「四方館」沿革記事の誤った解釈)など、時々おかしな記述に出会う。これらは原書にそう書かれており、歴史地理や制度史を専門外とする著者の誤解であろう。しかし、そうはいっても、第二章以下は百科事典としても十分に使用に堪える価値を有している。

なお、本書も『シノ・イラニカ』も原書には索引が付されているが、訳書にはどちらもそれがない。両書ともに思わぬ箇所には漢語の物品名が登場するのであるから、日本語の総合索引を作成すれば大いに学界の便に供するであろう。本書の出版を契機に、唐代研究が一層活況を呈するよう祈っている。

(いわみきよひろ 早稲田大学)



中国発行の日本語月刊総合誌

人民中国

People's China 4月号

人民中国雑誌社 定価400円(税込)
[年間購読料4800円(税込)]

【特集】中日関係
さらに発展させるには「スベシャルレポート」北京の春をあでやかに装う・玉三郎の「崑劇」中日合同公演【連載】チャイナ・パワーを読み解く④海外

外展開を目指す中国文化◆慈覚大師円仁の足跡を訪ねて⑩太原への道◆茶馬古道の旅⑭「太陽の宝座」ニンテイへ◆太極拳よもやま話④陳式太極拳(1)套路・推手◆わたしの一日・アウトドア用品店のオーナー劉志永さん◆中国文化そぞろ歩き・中国茶の故郷四川へ◆稲作文化の奇跡——雲南・元陽県のハニ族の棚田◆放談ざっくばらん・中国での子育てが楽な三つの理由はか

『人民中国』は中国で編集・発行される日本語雑誌です。政治、社会、考古、歴史、美術など幅広い分野の最新情報を満載。

ご希望の方に見本誌をお送りいたします。

☎03(3937)0300 東方書店